白夜

第 38 号

北海道スウェーデン協会

2017. 6

スウェーデンの思い出

杉本　拓

北海道スウェーデン協会が間もなく創立40周年を迎えようとしています。私が会長として20年近く、ここ数年高齢のためスウェーデンを訪問する機会がなく最近は過去の思い出や、情報を伝えてくれる会合、その他書物、メディアの映像などで最新の状況を得ようと努力しています。

昨今の世界情勢は目まぐるしく変化し、テロ事件などは各国に及びストックホルムのテロも報道されました。今こそ世界平和の実現のために各国の一段の努力が求められます。

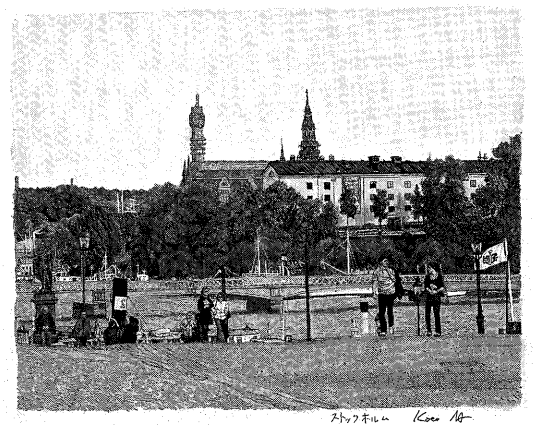
私が過去に訪れたスウェーデン、美しい水の都ストックホルムを最初に訪れてセミナー「サッポロデーinストックホルム」を開催したこと、スウェーデン協会20周年事業として会員がストックホルムを訪問し大勢の方と交流を深めたこと、リンショーピングに北海道から約100人の人々が参加訪問して生活文化展「Hokkaido Style 2006」を開催し交流を広げたこと、個人としても海と運河の港湾都市ヨーテボリで大学、ボルボ博物館を訪問したことや民族色が濃く残るダーラナ地方・シリアン湖を囲んで点在する北海道当別町の姉妹都市でもある湖畔の町レクサンドをはじめ青く澄んだ空、自然の美しい町々に滞在して心の落ち着きを満喫する一方で昂揚を覚える時でもありました。

このように過去訪れたスウェーデンを思い出しながらも毎年興奮を覚えるのはノーベル賞授賞式のある秋の季節です。受賞者発表からノーベルウィークが終わるまで報道に釘付けになります。ストックホルムコンサートホールでの授賞式、ストックホルム市庁舎青の間での晩餐会、黄金の間での舞踏会など部屋が目に浮かぶとともに世界平和を祈るときでもあります。

蛇足ですが、私は市庁舎のスタットヒェースレストランでノーベルメニューの食事をしたことがあります。2005年のメニューで私は2134番目、1994年のメニューの時は13086番目の客でした。1994年のメニューは大江健三郎さんがノーベル賞を受賞した年であり人気メニューなそうで、日本人が大勢訪れているのだろうとの思いをもちました。このように食事の記録が手元に残されているのも貴重な思い出です。

ご承知のように来年2018年は日本とスウェーデンが国交樹立150年という記念すべき年であります。既にいろいろ企画が計画されていますが、当協会も他の団体と協力しながら未来に向けて希望と期待の年にしたいと思います。

〈北海道スウェーデン協会会長〉



北海道の小町村市街地の再生～街中SC論

目黒聖直

筆者は、1997年４月から2000年７月まで３年３か月の間、仕事のためストックホルムで暮らした。それ以来、そのときに訪れたストックホルム近隣のショッピングセンターの姿をヒントにすれば、疲弊する北海道の小町村の市街地再生に繋げることができるのではないかという思いを持ち続けている。筆者は都市計画の専門家ではなく、全くの素人の見解ではあるが、このような観点から、その思うところを以下に述べたい。

余談になるが、我が国で最初のショッピング・センターと目される玉川高島屋ショッピング・センターは、その開業に当たって、担当者がストックホルム郊外のショッピング・センターを視察して参考にしたそうである。実際に視察したのは、ファルスタとベリングビーであったとのことだ。

何十年も前の当時、アメリカほどには自動車が普及していなかったため、スウェーデンのショッピングセンターは鉄道を利用して来店する客に便利なように駅の直近に立地し、それでも、自動車の利用にも対応できるように駐車場も整備してあった。これが、やはりアメリカほどのクルマ社会でなかった我が国ではアメリカ型のロードサイドショップは難しいと考えた視察者が、ストックホルムの方に注目した理由だという。

1　ストックホルム近郊のショッピングセンター

筆者がストックホルムに暮らしていたときに訪れたショッピングセンターも鉄道駅に隣接している場合が多く、ファルスタ規模の大型のものは特にそうだった。それは、ストックホルム市外のベッドタウン、たとえばソルナ、テービー、フディンゲやナッカ等の市（コミューン）の中心にある場合でも同様であった。ストックホルムの中心街で勤務を終えた人たちが、下車してそのまま買物をしてから帰宅することも多いのだろう。ちなみに、これらショッピングセンターに必ずと言っていいほどに出店していたのが、当時はまだ日本には未進出だったH&Mである。

筆者が少し驚いたのは、ストックホルムのベッドタウンでは、このようなショッピングセンターにはとても多くの店が入居しているが、地域の中にはほかには店が殆どないことだ。ところどころにキオスクがあったり（日本でコンビニが点々とあるような感覚か。ちなみに、当時のストックホルムでは、セブン・イレブンは街中にあるだけだった。）、別の地区に市内第二、第三のショッピングセンターがあったりするが、個人経営の店舗を見ることは少なく、ましてや数店舗が軒を連ねているところは全くなかったと記憶する。都市計画で出店が規制されているということがあったのかもしれないし、そもそも市有地の割合が高いので出店できる場所の余地がなかったのかもしれない。

欧州の都市というと、築百年、二百年、あるいはそれ以上に古い趣のある建物が道路に面して建ち並んだ景観がおなじみである。しかし、20世紀以降にストックホルムの発展に伴って新たに開発されたそのベッドタウンである各市においては、市の中心にショッピングセンター（市役所と接続している例もある。）が据えられて、その周囲に住宅群が広がっていく、という形で街ができていったということである。

これらショッピングセンターのテナントの中に、地元の個人店主経営のものがどれだけあったかはわからない。ただ、ある市の関係者に尋ねたところ、運営は第三セクターによっているようだったから、地元に根ざした施設にはなっているのだろう。

当時、筆者は、こんな施設が北海道の小町村

にもあればいいのに、と思ったものである。その頃の我が国にはまだ郊外型大型店もそれほどはなくて、そういった施設が珍しく思えたこともあるのだが、なによりも、通りに面して個人商店の店舗が並ぶ商店街に比して、一度入館してしまえば、どんなに寒くて吹雪いていても館内で快適に過ごすことができる。隣の店に行くのに一度寒い外に出る必要もない。だとすれば、北海道の商店街もショッピングセンターに衣替えしてしまえばいいのに、と思ったわけである。その意味でも、現在の我が国の郊外型大型店と違って、ストックホルム近郊のショッピングセンターは街の中心部にあるところが示唆的だったと言える。

2　北海道での類似のショッピングセンター

しかしながら、彼の地のショッピングセンターを実際にご覧になったことのある方がそれほど多いとは思えないので、まずは、イメージを共有していただくためにそれに近いものを北海道の中に求めてみたい。ストックホルム近郊を参考にしたのかは知らないが、同じような施設が昔から札幌にあったことに、なぜか最近になって気がついたのである。それは、新札幌アークシティである。

数多くの店舗や飲食店だけでなくバスセンターや文化施設など様々な公共的な空間が確保されているアークシティは、住宅地が広がるエリアのまん中にあって、新札幌地区の中心に位置づけられ、また、JRと地下鉄の駅にも直接に接続している。ストックホルム近郊の場合とは、道路を挟んでアークシティの反対側には別の商店群もあるところが違うけれども、第3セクターによる運営という点や、駅直結でありながら広い平置きの駐車場が確保されている（立体駐車場も併設されてはいる。）点も似ている。対して、たとえばJR発寒駅や地下鉄大谷地駅近くにも大型ショッピングセンターはあるが、駅近くと言っても基本的には自動車での来訪を想定しているように見えるし、また、その地区の中心地点であるという印象は希薄である。

アークシティには、たとえば、車道に分断されることのない地上部の歩行者専用通路がないなど残念に思う部分も少なくはないが、こんなイメージの建物を他の道内市町村の市街地でもつくればいいのに、と思う。

3　北海道における市街地の再生

今日の北海道の市町村の中で、街中（本稿では「市街地」とも言っているが、同じことである。）が賑わっているのは札幌や帯広など極僅かの都市だけで、殆んどの中小都市や町村の街

ストックホルム近郊のショッピングセンターNacka Forum（同施設のホームページより）

中は、寂れ果てているというしかない。建物は老朽化し、全く人通りはない。ゴーストタウンのようだと言って過言ではないところも多い。

そうなった最も大きな理由は、これまで、消費者を満足させる品揃えの大型店舗を既に建物が密集している街中に新たにつくることが難しかったために、街はずれの自動車でアクセスしやすい場所に郊外型大型店やロードサイドショップが開設されて、そちらに向かった人々が街中から遠ざかってしまった結果だと考える。だから、実現が簡単ではないことは理解しているが、理屈としては、街中に人々を呼び戻すためにはそこにショッピングセンターをつくればよい、ということになる。

その際、留意すべきは、その建物が以下の諸点を満たすべき、ということである。

（1）その街で一番となるような大型の建物であり、その堂々たる姿によって街の顔としての役割も果たす。

（2）地元の商店が集まり、地元が運営する。

（3）市街地の中心として駅舎又はバスターミナルも兼ねるが、広い駐車場も有する。

このうち、（1）については、現在が寂しさの漂う市街地だったとしても、そこに新たな輝きをもたらす街のランドマークをつくろうということである。

（2）については、過去にいくつかの中小都市において、全国展開する大型スーパーが、会社の業績不振等により撤退してしまって街中に空きビルが生じてしまったという事例があったことを踏まえれば、その土地に根ざし、その土地でしか生きていけない地元の商店やその集合体が新しい施設の運営主体になるべきである、ということだ。

全国的に見れば、下関市の駅前には第三セクターの巨大なショッピングセンター（ただし、キーテナントは全国展開する百貨店）があり、広島県三次市の駅近辺には、それぞれ別の協同組合が経営する二施設がある、というように地元が商業施設を運営していて、地元の商店がそこに集結しているという例がある。こういった都市ほどの人口がないところでは、地元による設立例は聞いたことがないが、他方、道北の枝幸町には、名寄市が本拠の民間企業による平屋建てながらかなり大きなショッピングセンターがあり、街中に大型商業施設をつくること自体が不可能なわけではない。そして、この御時勢に、全国展開する企業が、少なくともそのような小町村に出店するとは考えにくく、それも、地元自体が商業施設を設立することが望まれる理由となる。

全国展開する企業による建物だと、一時はやった言葉であるファースト風土化ではないが、全国どこでも似たたようなものになってしまう。地元の力で設立してこそ、そこだけにしかない建物ができる。第三セクターであるとの説明を受けたストックホルム近郊のショッピングセンターにしても、各ベッドタウンごとに、建物の形や大きさは多様で、地域色というほどではないにしても、それぞれ個性的であった。

しかも、今日の我が国では、仮に街中に全国的なショッピングセンターがあった場合、その店舗は大いに繁栄するが、買い物客をそこに囲ってしまい、客が周辺の地元商店街に流れるという動きが全く起きない、という状況が見られる。だからこそ、自店の経営だけを考えがちな民間企業ではなく、地元の力が主体となって商業施設をつくって、たとえば他の公共的施設（金融機関、駅舎、図書館、公営病院等）との間を空中廊下によって接続するなど、街全体に人が行きわたるような工夫をすることが大切である。

そのことと関連して、（3）で指摘したようにこの新しい施設には広い駐車場をつくりたい。つまり、駅舎やバスターミナルも兼ねる施設にした場合でさえでも、北海道においては自動車による来訪ということを考えないのは非現実的である。そして、そこでは、たとえ立体駐車場が併設されるにしても、平置きの駐車場も整備

したい。立体駐車場は雨の日の乗り降りでも濡れない等のメリットはあるが、よそから来た者には街中で入り口が見つけにくく（たとえば、滝川のスマイルビルや浦河のMiOショッピングセンターの駐車場）、また、地元の人たちにとっても、特に小町村にあっては、閉塞感があって運転操作にも気を遣う立体駐車場は好まれないことも多いようだ。

現在、市街地の真ん中にある千歳や江別市野幌のショッピングセンターには、広大な敷地の駐車場がある。道内には両市より人口の多い都市は僅かしかないから、殆んどの市町村では、物理的には街中でも広い駐車場敷地が確保できるということになる。そして、もしもそれができるのであれば、街中の駐車場は極力そこ一箇所に集約して、それを他の公共的施設の利用者にも開放されるようにすることが望ましい。

ある札幌近郊の中都市の駅前周辺には、二軒のスーパーと線路の反対側の図書館という三つの大型の建物が集中しているが、各施設はそれぞれ専用駐車場を有している。スーパーでは買物をすると駐車代が無料になるということもあって、隣の施設に行くには、目と鼻の先なのに車をそこの駐車場に移動させなければならない。二軒のスーパーは互いに商売敵なので自前で駐車場を用意しないとならないのだが、それゆえ建物間を歩いて行き来することにはならず、街から歩行者が消えるわけである。

駐車場の話題とは関係ないが、札幌の北三条広場は、もともと車道だった。だから、広場と名乗ってはいるけれど、実質、そこは歩行者天国である。そして、歩行者天国にすることでそこに滞留する人の数は明らかに激増した。だから、自動車で訪れる人が多い地方都市や小町村の街中にあっても、大きなひとつの駐車場に車を停めて、その周囲に建ち並ぶショッピングセンター等の公共的施設同士の間は歩行者天国にした道路を行き来するとすれば、歩行者が増え、賑やかさが戻ってくるはずである。その際、施設群の並びに集合住宅を建設して、特に高齢者などが居住することにすれば、買物なども歩いて済ませられるから、買物難民の問題も高齢ドライバーの運転ミスの問題も起こらない。ショッピングセンターにしろ、集合住宅にしろ、新しく整備すれば、綺麗な建物が建ち並ぶ街並みが形成されて、景観的にも好ましいものになる。

4　小町村における街中SC

市街地の再生のためには、前項で述べたような観点から、ショッピングセンター、その他の公共的施設、駐車場、歩行者天国を一定のスペースにどうやって収めるか、つまりは、複数の施設等の集約をいかに進めるかということが検討されるべきである。特に、駐車場や歩行者天国といったことは普段の議論の中で忘れ去られている。

とはいえ、大規模な再開発事業を行う資金や主体を見つけるのが難しい道内の中小都市が、既に建物が多く存在している市街地の再編を行うのは簡単なことではない。その点、いくらか取組が容易であると考えられるのは人口数千人の小町村である。

人口減少が進んだことなどにより、街中には建物がなくなって、まとまった空き地も見つけやすく、そんなところにまずはショッピングセンターをつくれないだろうか（筆者は、街中にあるので、それを「街中SC」と称している。規模やテナント数で本来の意味でのショッピングセンターの要件は満たさないこともあろうが、その市街地再生のために人口数千人の小町村につくる建物を街中SCと呼ぶわけだ。）。

小さな町では、既に商店の数も激減しており、ひとつの大きな建物をつくって、そこに、スーパー、飲食店、理髪店、図書館、バス待合所、診療所等をすべて収容してしまうことにも困難は比較的少ないと思う。そうすれば、町民が普段必要とする財やサービス（公共サービスを含む。）は、すべてこの建物を訪れれば済ませられる。隣接していくつかの集合住宅をつくる動き

にもなろう。近くに役場などもあれば、町内の企業も利便を求めて周辺にオフィスを移転してくる。最初に街中SCを役場の近くにつくれば、それ以外の建物は自然と集まってくる、という流れが期待できるわけだ。最初は街中SCをつくるだけなのだから、人口が万単位の都市の場合よりはずっと簡単だろう。

とはいえ、簡単だから小町村で、ということではない。重要なのは、北海道の自治体の大部分が人口一万人に満たない小町村であり、それらのことを考えるのは、北海道全域を考えるのに等しいということである。石狩地域を除く日本海側や稚内と紋別に挟まれたオホーツク海沿岸等の地方は、近くに都市がなく、小町村だけで成り立っている地域だとも言える。だからこそ、それら小町村の市街地が、機能的で景観的にも優れたものになって、本当の町村の中心になっていくことが必要なのである。

5　具体的イメージ

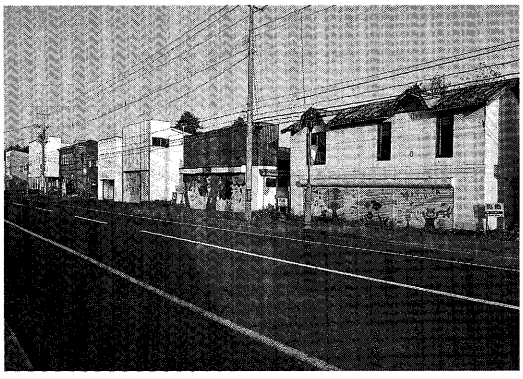
前項に述べた街中SCを紙上で実現してみたい。

ここで例にする栗山町は、人口が１万を超え、筆者が街中SCをつくるべきとする小町村には当たらない。しかも、駅前通りが綺麗に整備されていて、いつ訪れてもいくらかの人影を見ることができるから、老朽化した建物が建ち並んでいて人気がない道内の他の小町村で見られる惨状からは最も程遠い町のひとつだ。しかし、だからこそ、例として取り上げてもさほど失礼には当たらないであろうと考える。

さて、JR栗山駅の駅舎は、カルチャープラザEkiという町民ホール等からなる公共施設と一体化した建物である。町民ホールの立派な建物というのは道内の他の町でも見ることがあるが、イベントがない日には誰も寄りつかないから、どこも休日でさえ閑散としていることが多い。それでもカルチャープラザEkiの場合には休憩スペースがあって、町の規模が比較的大きいだけにいつも高校生たちなど誰かが談笑していたりするが、それにしても、偶然イベントのある日に訪れて目撃した大変な人の多さを考えると、普段はずいぶん静かであると言わざるをえない。十分に活用されているとは言いにくい。

そこで、現在、この建物に設けられている多目的ホールをスーパーに入れ替え、二階の研修室部分に飲食店を収容すると想像してみよう。

そうすれば、通勤帰りなどで列車を下車した人が、ここで夕食のための買物をしてそのまま家に向かうことができる。また、栗山駅前はバス発着場にもなっているから、バス発車のギリギリまで買物をすることができるし、買物が早めに終ったときには出発時間前にバスに乗り込んで発車を待つこともできるのは始発のバス停なればこそである。駅から離れたスーパーではこうはいかない。若干歩く距離はあるが、駅舎前方右側には既に広い駐車場があるから、車で



人気のない北海道の街の例（いずれも、休日の日中の時間帯）

の利用も容易である。

また、二階に飲食店があれば、買物途中の人も列車待ちの人も近隣のオフィスの人も利用できる。もしも需要があるのなら、現在は小サークル室になっているスペースにいくつかのサービスを提供する施設、たとえば旅行代理店、整骨院、歯科医院などを入居させることで、それらは買物等ほかの目的で来た人たちも客として取り込める。

やや大げさに言えば、小型のステラプレイス（札幌駅ビル）ができあがるわけだ。

駅前には既に銀行があるから、その用事のついでに立ち寄っていくこともありえよう。

前述のとおり栗山の場合は、急いでそこまでしないとならないような危機的状況ではないが、道内のほかの小町村では、現状の豪華な、けれども、ひっそりとした町民ホールをそのように改装した方がいいと思われるところも多い。そして、立派な町民ホールは有していないという町なら、こんなイメージで新たな建物をつくることが、市街地の再生に絶対的に必要であると考える次第である。

＊　栗山町のホームページのトップ画面左下にある「公共施設の概要」からカルチャープラザEkiの見取り図が見られるので関心のある方はご覧ください。
http://www.town.kuriyama.hokkaido.jp/shisetsu/ctp.html

6　最後に

街中SCをつくれという主張をする人はあまりいないからだろうか、筆者は一介の公務員に過ぎないのに、時に、勉強会の集まりなどで街中SCについて話しをしてくれと頼まれるようになってきた。筆者の考えが、少しでも市街地の再生のための取組に取り入れられるような動きになっていけばと切望している。

なお、こうした道内地方市町村の市街地再生に関する私の考え方に大きなヒントを与えてくれたストックホルム近郊のショッピングセンターであるが、スウェーデンの地方小町村の街中にも同様の施設が必ずあるわけではないことは念のために記しておく。古い建物を利用して生鮮食品市場（いちば）としているという話などは聞くことがあるが、少なくとも、古い街並みが残る街において、それを壊して新しい巨大ショッピングセンターをつくるということは、スウェーデンのみならず欧州ではおそらくはありえないであろうこと、言うまでもない。

〈国土交通省・北海道開発局〉

スウェーデンの伝統音楽を学んで

～日本との違いと現状～

野間美紀

はじめに

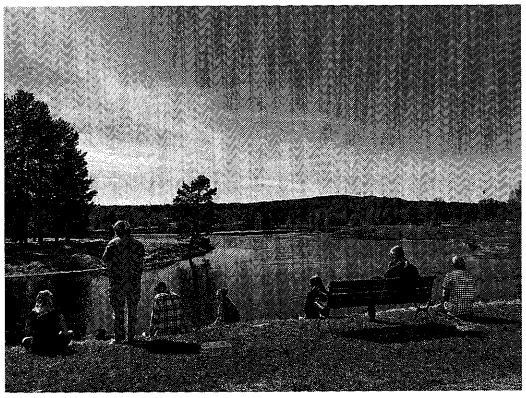
2015年の８月から2016年の５月末まで、私はスウェーデン・ダーラナ地方のマールン（Malung）という町へ留学に行ってきました。Malungsfolkhögskolaという、日本語にするとマールン国民学校・専修学校などと訳される学校で、伝統音楽コース伝承歌クラスで学んできました。クラス名の通りスウェーデンの伝承歌、日本でいう民謡を学んだのですが、スウェーデンでは日本に比べて民謡や伝統音楽への認識や意識が全然違うと感じました。そのことについて、今回は少しお話しさせていただきます。

スウェーデンの伝統音楽・伝承歌とは

伝統音楽・伝承歌・民謡と様々な言葉を使っていますが、まずはスウェーデンの伝統音楽とは何かということについて触れたいと思います。

ここで言う伝統音楽とは、一般の人々・民衆の間で継承されてきた音楽のことをいいますが、スウェーデンの伝統音楽は大きく二つに分けることができます。楽器（主にバイオリン）

学校の様子：天気の良い日はよく外で楽器を弾きます。



学校の裏を流れる川：授業の後日光浴をしているクラスメイト。

のみで演奏される音楽と、歌い継がれているものです。

どちらにも共通することは、ほとんどの曲は楽譜や歌詞カードのようなものがなく、耳伝え・口伝えで受け継がれているものです。そのため、同じ曲でも地域や伝えた人によって少しずつ違います。曲名の表記はよく「○○（曲名）efter　△△（名前）」または「○○（曲名）från ××（地名）」またはefterとfrån両方という書き方をするのですが、このefter誰それやfrånどこなのかがその曲を知る上で重要視されています。地域ごとに有名なスペルマン（＝演奏家）がいてその人が弾き、もしくは歌い伝えた曲として大切にされています。

異なる点は、歌い継がれているものは歴史が古いこと、歌が歌われる目的・内容やリズムの種類が多岐に及ぶ点です。人類の歴史と同じくらい歴史が古く、おそらく子守唄や労働歌が最初に生まれた歌ではないかと言われています。他にも、

・子供の遊び歌、
・ラブソング
・乾杯の歌
・放牧地の歌
・聖歌、賛美歌
・ニュースを伝える歌（新聞やテレビがなかった時代に離れた場所へ伝える）
・中世のバラッド（物語歌）
・ダンス音楽（歌詞があるもの、楽器の音を声に“翻訳”して歌うもの）

などの歌があります。

家のキッチンでテーブルを囲んでいる時、暖炉の前で糸を紡いでいる時、宴会で盛り上がった時、夏の放牧地で牛を放牧している時…。それぞれの歌は生活に密着しており、家族や親戚、同じ地域に住む人から耳にすることができます。

一方、楽器で演奏される曲はポルスカというリズムのダンス音楽を中心に主に結婚式やダンスの伴奏として楽しまれています。1600年代に安いバイオリンが大陸から入ってきたのち、田舎を中心に人気となったと言われています。スウェーデンではバイオリンのことをフィオールとも呼びますが、この呼び方は特に民俗音楽の世界でバイオリンのことを親しみを込めて呼ぶ俗称です。

「伝承歌」という表現はスウェーデン語のfolkvisaを直訳した表現で、口伝えに受け継がれている歌という意味で使っています。日本でいう「民謡」と同じ意味の言葉として使っています。

セッションを体験する

私がスウェーデンにいる間、伝統音楽が本当に身近にあるということに驚きました。例え

学校でのダンスの様子：週に一度はダンスの時間があります。

スペルマンスステンマの様子①：プロの演奏家によるステージの様子です。

ば、同じ歌のクラスにいた友人の女の子はご両親が共にフィオールを弾く人で、地域の伝統音楽の振興に関わっておられる方でした。地元で伝統音楽奏者のコンペティションを開催されており、昨年は地域の演奏家を連れて関西の北欧イベントにも参加しに来られました。その子のお家へ遊びに行かせてもらった時の体験が、とても印象的でした。

地域の演奏家を集めてセッション会を開催してくださいました。楽器はフィオールがほとんどですが、手作りの縦笛やアコーディオン、ギターを弾く人もいらっしゃいました。プロの演奏家もいれば、趣味でやっているだけなのにとても上手い人、たくさん曲を知っているおじいさんや学生まで、15～18人くらいいたと思います。何曲か弾いてはフィーカして、また何曲か弾いて、またフィーカして、今度は歌って…と広いリビングで夜遅くまで弾いたり歌ったり、日本から伝統音楽を学びに行った私にとっては夢のようなひとときでした。このようなセッションの集まりは月に何回か定期的にしているということでした。

この友人のような音楽一家を家族に持つ人は何人か他のクラスメイトにもいましたし、納屋でフィオールを発見したから伝統音楽を始めてみたという人や、おばあちゃんがよく歌っていたからたくさん知っている歌があるという人もいました。もちろん、伝統音楽のコースに通っているのですから興味がある人、音楽に関して特殊な環境で育った人が集まっていることは事実です。しかし、このように伝統音楽が身近に感じられ、愛されている場面に日本ではまだ遭遇したことがありません。

学校とスペルマンスステンマの役割

伝統音楽を学校で学べる環境があるということはスウェーデンの伝統音楽シーンにおいてとても注目すべき点です。スウェーデンにはfolkhögskolaという学校が地域ごとにあり、音楽だけでなく手工芸や織物、革加工や鍛冶など地域の伝統文化を守り伝えていくことに役立っています。Folkhögskolaは高校を卒業していれば誰でも入学することができ、高校卒業して大学を決める前に自分の適性を知るために来る人、社会人となってしばらく働いてから自分のレベルアップのために仕事を中断して来る人、働きすぎて疲れた人が1年間休暇をとりながら学んでいる人、育児しながら通う人など老若男女いろいろな目的･目標を持った人が集まっています。留学生として入学した私も含め、このように来る人はすべてあたたかく受け入れてくれ、学べる環境があるということはとても貴重で素晴らしいことだと思います。

1994年にストックホルム音楽大学（Kungliga Musikhögskolan i Stockholm）に伝統音楽学部が設置され、90年代後半からファールンの音楽

スペルマンスステンマの様子②：広い会場内では至る所でセッションの輪ができます。

カレッジに伝統音楽科が設置されたり、エリックサールストロムインスティチュート（通称ESI、ニッケルハルパの専門学校）ができたりと高等教育でも伝統音楽を学べる場所や、選択肢が増えました。この時期から更に伝統音楽を聴いたり演奏したり歌ったりする若者が増え、シーンが盛り上がったと言われています。

また夏になると「スペルマンスステンマ」と呼ばれる野外音楽イベントが開催されます。スペルマンスステンマは、商業ベースで開催される伝統音楽フェスティバルとは違って誰もが演奏したり歌ったり踊ったりできる、愛好家のためのイベントです。会場のあちこちの芝生の上やベンチでのんびり楽器を弾く人、歌える人が自分の歌のレパートリーを交換し合う集まり、夜通し踊る人やダンスの伴奏をする人など、思い思いに伝統音楽を楽しめる素晴らしいイベントです。もちろん、プロのミュージシャンが行うステージもあるので、そちらも楽しみのひとつです。スペルマンスステンマは6月の第2週目の週末あたりから7月いっぱいまでほぼ毎週どこかで開催されており、プロの演奏家、地域の演奏家、趣味で楽しんでいる人、学生などが交流できる良い機会です。学校で学びやすいだけでなく、こうした機会もあるため伝統音楽をより身近に感じられるのではないかと思います。

Svenskvisarkivetの存在

ストックホルムにSvenskvisarkivetという機関があります。これはスウェーデン中の伝承歌の録音、歌詞のデータを地域別に収集し管理しているアーカイブです。この施設は誰でも利用することができ、例えば曲名だけ知っている歌の出身地域を調べたり、曲名を検索したり、歌詞やメロディーの別バージョンを検索したりすることができます。直接現地に行くことができなくても、メールで問い合わせることも可能で、私も授業で先生に習い何度か利用しました。また、地域ごとにもこのようなアーカイブがあり、同じように誰でも調べて、音源があるものは聴くこともできます。国がこのように伝承歌を集め、保護していることにはとても驚きました。

また、このようにしてアーカイブされている歌には著作権がないため、自由に歌って良いということにも驚きました。さらに、歌詞が気に入らなかったら好きな歌詞に入れ替えたり変更したりしても良い、と私の歌のクラスの先生はおっしゃっておられました。なぜなら、伝統は生きているから、と先生。このようなスウェーデン人の懐の深さが伝統を身近に感じ、生かしているのだということを知ることができました。

現在の伝統音楽シーン

スウェーデンで盛り上がりをみせている伝統音楽シーンですが、いくつか懸念する点もあります。一つは若手の演奏家がプロとして活動していく受け皿が少ないということ、また国が音楽のコンサートやイベントに対して補助してくれるお金が年々減っているということです。90年代後半～2000年前半に主流だった大人数のバンドが活動を休止したり現在は少人数の編成に縮小したり、国内外の大きい北欧伝統音楽フェスティバルが廃止されたりしています。このため、学べる環境が整っていて演奏家は増えても、仕事にできる人が少ないのです。スウェーデンの現在の経済状態が影響していると聞きまし

た。しかし、こういった流れはまた新しい音楽や演奏のスタイルが出てくることも期待されています。

最後に

一年間の留学を終えて、スウェーデンに対しては感謝の言葉しかありません。スウェーデン人は皆、外国人である私に対しても分け隔てなく接し歓迎してくれ、無償で自分たちの伝統を共有してくれました。伝統や伝承歌を学ぶということは、本来であれば地域や家庭の中で時間をかけて文化や生活とともに学ぶということ。この一年で彼らが分け与えてくれたことを次へ繋げると共に、この一年で終わりではなくこれからもスウェーデンを訪問し、勉強と交流を続けていきたいと強く思います。

最後になりましたが、今回の執筆のきっかけとなりました北海道スウェーデン協会新年講演会の中にて演奏の機会を作ってくださいました坂本千鶴様、演奏をお聴きくださった皆様、そして原稿をご依頼くださった加藤誠先生に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

〈スウェーデン伝承歌歌手・講師〉

#Inlandsbanan
インランツバナン

臼井　寛

この名前聞いたことありますか、内陸線と訳せばわかりますか。スエーデンの鉄道について少し語りたいと思います。

欧州の常識

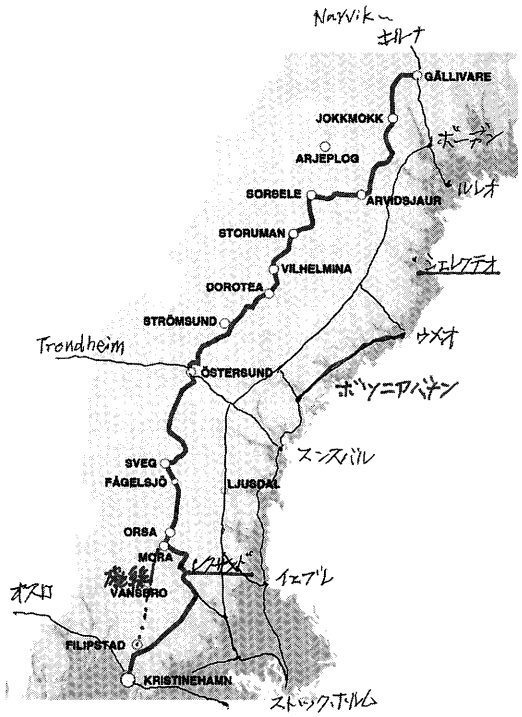
欧州の人は道路と鉄道は国家国民のものという意識があってワンランク上の権利を与えています。ですから当然税金の投入に違和感はありません。交通が良くなければ国家の発展がないというのは多くの国が踵を接しているのですから当然でしょうが。EUでは毎月交通大臣が集まって懸案を処理しています、EUの４大柱ですから。

スエーデンはその中で一目置かれている先進国です。1988年に実施された交通政策法によりいわゆる上下分離民営化で、これは後にEUの手本となるのです。具体的には線路などインフラは国営にしてBanverketという官庁が行い新国鉄SJは旅客列車の運転だけに専念します。貨物は参入自由で元SJの貨物部門はGreenCargo㈱になり、TGOJ、LKABなど数社が参入しました。国土は日本の本州位あるのに人口は800万足らずでしたので採算が取れない線が一杯あります。２大別して、共同体のためsamhälleconomiの線区、県が維持・運営、存廃を管理する。補助金は出さず切符を買い取る方式である。

ビジネスで賄える線区Affärsbanenätetとしてオープンアクセス自由参入で線路使用料を払えばよい(この中に社会的費用も含まれている)ただし段階的に実施された。

1994年EU市場統合に伴い各国はスエーデン方式を採用することにして上下分離をして各国別にインフラ会社を設立しました。

それで幹線ストックホルム―ヨーテボリ、マルメ間ストックホルムから北へボーデンまでがビジネス線区で後は支線区で県が運営しているが、コンセション方式で業者に競争入札で少しでも安く上げるようにしている。年度を７年とか５年とかに切って業者が年次計画を立て利益はどのくらい取って、新車をいつ入れるか等具体的費用を計上して収支計画を提出させて一番安く見積もった業者に落札する方式。これにより不具合が多かった場合再入札となり交代するが、実務者は交代しないで経営者のみが変わる。欧州ではこれが普通となっている。しかし小さい所では補助金制度が一般だ。



現用幹線とインランヅバナン

できた経緯

ここまでが予備知識であるが、インランヅバナンはもっと特殊だ。この鉄道は内陸部を通っているので奥地開発の意図もある。もう一つは国防上の意味がある。スエーデンは11世紀から19世紀まで大人しくしていたのは12、14世紀だけで各世紀戦争をしていて最大版図は東欧圏に及んでいた。しかしそれを阻んだのがロシアでこの間6回も戦って、ついには1809年、13世紀からスエーデン領だったフィンランドとエーランド諸島を取られてしまう。不倶戴天の敵でこの時からロシア警戒症というか国民の中に醸成されたのではないか。そのためボスニア湾沿いの鉄道は海岸を通らず一歩引きさがって建設された。枝幸町と姉妹都市シェレフテオは港町で海岸にあるので本線から30kmも離れているので昔は支線があったけど今はルレオからバスしかない。いまさらロシアの脅威等はないだろうということで南隣町ウメオまでは新幹線規格で海岸線がボツニアバナンという名で開業し急行列車は利用しているが、ルレオ迄の延伸は人口の少ない所に多額の投資はどうもということで棚上げとなっている。ボーデン迄の所要時間は短縮されたことは間違いない。

インランヅバナンはもっと山側を走っている第2南北線の役目を負っている。

南端はベーネルン湖岸のクリスチーネハムンKristinehamn名前の通り港町でこの湖はヨータ運河に繋がっているのでストックホルムにもヨーデボリイにも舟運が使えるので便利。北に10km線路が1850年開業の私鉄で当初は1099mmゲージの狭軌で後に1435mm標準軌に改軌そのあと二つの会社が北に延伸させてモーラMoraに達したのが1891年。41年もかかった。その後二つの会社がかかわってスベグSvegに達したのが1909年ここまでに59年を要して359kmを民間が建設した。これを見て国会は国鉄SJでスベグ—イエリバレGällivare間916kmを建設する事を1907年決議した。

目標は1928年開業であったが1937年（昭和12年）やっと開業した。これには第1次世界大戦1914-18勃発で資材、労力不足で中断したこともある。全長1288kmであるが国鉄が建設した区間は湖沼が多く村落が散在して平坦地ではあったが蛇行しているのでひまが掛った。札幌から東海道線の浜名湖あたりになる。無くなったトワイライトエキスプレスなら福井までだろう。

これによりスエーデンは第2の南北幹線を得た。スベグ以南の私鉄は全て国鉄に買収された。第1次世界大戦には間に合わなかったが中立国であったのでこと無きを得た。完成して2年後には早くも第2次世界大戦勃発1939年、中立を宣言したが武装中立だから相当の準備が必要であった。

海軍はかなり前からそれなりの用意はあったが、第1次大戦後半から登場した空軍は威力は承知していたが準備はととのはなくスウェーデンの空を守るには程遠い状態であった。急きょ各国に買いに走ったが自国優先でイタリヤが複

葉戦闘機、ドイツが水上攻撃機をすこし提供してくれただけでなさけない状態でやはり自立しかないと1937年創立のSAABスエーデン航空機会社を育成するよりなかったが大戦中に戦闘機を供給することはできなかった。

スエーデンは良質の鉄鉱石を産出するが石炭は出ないので鉄鉱石を英、独に輸出して帰りの船に石炭を積んでくることで、製鉄や蒸気機関車が成り立っていた。しかし石炭は割高で豊富な水力電気があるので、技術的に難しい鉄道の交流電化を積極的に取り組んだ。その結果殆どの幹線の電化は完了した。もし敵が攻めてくるとすると発電所や変電所ではないか、さすれば幹線の列車は止まってしまう。それで考え出されたのがBeredskapsloken戦備機関車でSteamLokomotive：SL蒸気機関車ならば薪と水があれば動く、スウェーデンならどこでも得られるとして要所要所に沢山のSLを準備し整備を怠らなかったのである。幸い何事もなく大戦は終わったのであるが、ソビエトが東欧諸国を占領し鉄のカーテンを敷くにおよび警戒心が強くなりこの措置を解くことなく継続し全ての機関車をオーバホールして戦時体制は続いた。敵は陸伝いにフィンランドから攻め入って来ることを想定し、インランヅバナン北部沿線には多数隠された。1966年の調査によると国鉄は100両余であったが国防軍所管は400両を超えていたという。1972年国鉄でのSL運行は廃止になりスクラップになったが戦備機関車はプラスチックシートでモスボールされ錆びないように排気ポンプが付けられた。分からないように林間に小屋を作ったり砂利鉱山等に隠ぺいされ引き込み線は常時は切り離してあり非常時に繋ぐ工夫もされていた。国鉄職員は国民皆兵であるので１年１回はこのSLの整備稼働をしなければならなかった。しかしソビエトが解体しロシアになってからこの制度は止めることになりぞくぞくと廃車にされたり博物館行きになり完全に整理されたと思われていた。

インランヅバナンの独立

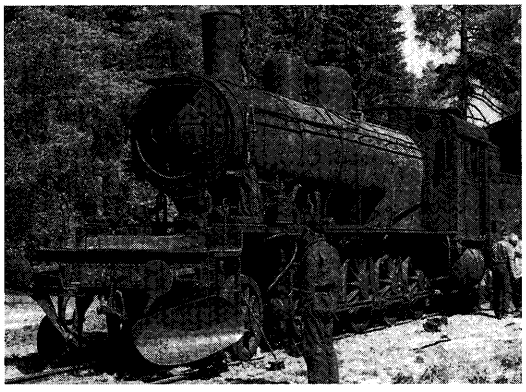
インランヅバナンは1988年民営化により共同体の為として営業していたが1992年までに不採算路線として全線モスボールにすることを決定し、モーラから南方向にフィリップスタドFilipstadまでを廃止、モーラから北は沿線自治体に分割売却してしまう。1990-91年はバスに転換したが住民に不評、選挙で勝った社民党が方針転換し1992年インランヅバナン㈱を設立。国や沿線自治体、財団等が株主で本社は中央に位置するエステルズンドÖstersundに置かれ起点として南北に列車が1993年から運行されている。旅客は夏季３ヶ月間、貨物は通年で材木が主体。モーラから南は廃止されてしまったのでレクサンド、ルドヴィカ等を通る在来線を利用してクリスチーネハムンまで年間運行している。終点から40kmは最初の線が使われているが、2012年電化したのでモーラから電車で通し運転ができるようになった。夏季３ヶ月間の設定は毎年動くので予め時刻表や旅行社、ネットで確かめる必要がある。2012年から冬季にモーラとエステルズンド間にスキー列車が走るようになった。モーラとマルメ間にはスキー夜行列車も設定されたがリクライニングシート車が足りないので客は満足していないようだ。またパックツアー等が用意されているので調べるとよい。同社が運行するのは南方向モーラまで、北方向イエリバレ毎日上下各１本でキハ（ディーゼルカー）１から２両で運行。イエリバレ迄14時間で表定速度53km/hでゆっくり列車である。夏だから日が暮れるのが遅いから写真はずっと撮れるだろう。林間列車を楽しまれてはどうだろう。インフラ整備を担当するBanverketは2010年Traffikverketという陸海空のインフラ管理庁に一本化されたことによりInfraNord社に委託された。同社のもう一つの収入源は貨物であるがオープン・アクセスと言って貨物会社が何社かあって荷主と契約して物を運ぶので線路使用料をもらうわけである。豊富な森林資源が貨物で特に冬が忙しいので年

間利用されている。近年荷物が重たくなって軸重を22.5トンに増す工事を行っている。

発見された戦備機関車

2016年全廃されたと思っていた戦備機関車がSL：２両SJ E2 948と954が本社のあるエステルズンドから15kmくらい北のLitsnäsetという地名の所でナマコ鉄板の小屋に保存されていることが判明。本線と側線は切り離してあるので気がつかなかったことと人家の無い林間にあった。1972年以来動かしていないのでモスボールを外して火を入れたところスエーデン国鉄特有の汽笛は鳴ったが動かなかった。中を調べたらインジェクターという蒸気をシリンダーに送る部分が故障していることが分かった。両機はGävreにあるSJ鉄道博物館に引き取られた。44年の間誰も気づかなく保管されていたなんてスエーデンらしい話しですね。完

〈本協会常任理事〉



発見された戦備機関車SJ E2 954号
Bob Sweet撮影©Today's Railways
Feb 2017

息子をイギリスの寄宿高に転入させて半年

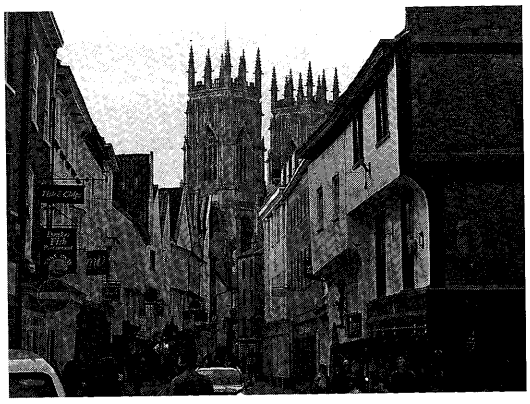
鈴木　岳

息子は現在イギリスのヨーク市にある寄宿校の中学最終学年を過ごしております。GCSEというのですが、そこを卒業して試験に合格したら晴れてシックスフォームという大学進学を目指すクラスに進学します。期間は２年です。ですから、シックスフォームが高校相当といえばそうなのですが、日本に当てはめるなら、息子は現在高校一年生をもう一度、英語でやり直しているような状況です。

国が変われば随分と教育制度が違うものです。高校生ながら授業は選択教科があるんです。息子はビジネス、コンピューター、英語、数学、自己啓発、体育、物理を学んでいます。お気付きのようにそれしかやってないんです。大丈夫なんでしょうかね？

息子は小学校一年生から５年生までをスウェーデンの小学校で学びました。ストックホルムのRödabergskolanローダベリスコーラン（赤い丘の学校）はスウェーデン語で学べるクラスと英語で学べるクラスがありました。外国からの研究者子弟やスウェーデン人の中でも英語で学ばせたい家庭の子が英語クラスに通っていました。息子はここで英語による授業を受けていました。スウェーデンの小学校はゆったりしており、子供の感性と個性を伸ばすことに主眼をおいた教育方針に感じました。子供達は好きなことをのびのびとやらせてもらえ、息子は自己肯定感と万能感にあふれていたように感じました。

ところが日本に帰ってみると、小学校のカチカチとした緻密なスケジュールにとても驚きました。例えば帰国後すぐに経験した小学校５年生、すずらん公園での一泊二日の研修旅行などはたくさんの用意させる持ちもの（普段滅多に



Yorkの街並み

Queenethelburgas collegeの校舎の一角

使わないものも含む）が指定され、朝から晩まで役割分担とスケジュールが分刻みで決まっているものでした。せっかくのクラスでの旅行なのに、こんなに時間通りやらねばならぬものか？と非常な違和感を感じました。日本しか知らねば当たり前のことかもしれません。一方、スウェーデンの研修旅行は担任の自由裁量で楽しい思い出作りとコミュニケーション作りが主目的でした。親もボランティア参加して楽しいものでした。

息子は中高一貫教育の進学校に進みました。そこは高校２年生までに全教科を終わらせて受験に備える仕組みでしたので、授業進行が速く、宿題もたくさんありました。こなすためには部活動や趣味に費やす時間を減らさざるをえませんでした。かろうじて英語教室とバイオリン教室へ行かせ、ほかは塾通いでした。毎日帰宅が遅いのが当たり前になりました。日本の授業は暗記が中心で、考える授業や意見を戦わせることを目的にした授業はありませんでした。私は自分でそんな道を通ってきておきながら、暗記中心の日本型教育制度はもう古くさく魅力を感じませんでした。息子は一生懸命、学校のあとは夜遅くまで塾に通い、主要教科だけはなんとか中間層にぶら下がり続けていました。日本では過大に重要視される英語だけは抜きん出ていたので、このままやれば日本の医学部も視野に入れそうな感じでした。ところが、息子とのいさかいは絶えませんでした。それは勉強以外の青春を謳歌すべき時に謳歌させられない抑圧も一因と思われました。思春期の子とぶつからないで済むことはないだろうし、むしろ自然なことでしょう。また、多くの日本人はこのベルトコンベアー式の画一的な教育制度の中で上位を目指して格闘するのが普通です。私たちはスウェーデンに住んでしまったおかげで、その日本式教育制度が誤っているのではないか？全部が誤っていなくとも大きな欠陥があるのではないか？と抑えきれぬ問題意識を抱いてしまいました。確かに息子の成績はそこそこ良かったけれども、それと引き換えにスウェーデンでの生き生きとした表情を失い、自己肯定感とあふれる万能感、エネルギーに満ちた態度を失くしました。それを見ているのは大変に辛かった。そして、このまま彼を型にはめるようなやり方が、人生に本当に役立つことなのか？と自問自答した時、答えはノーでした。

ティーンエイジは豊かな感性を持つ多感な世代で、まさに人生における天才期に思えます。この時期に暗記勉強だけをたたきこむのはあまりに勿体無く、遊びも芸術社会活動もたくさんやらせてあげたいと思いました。また、考える力、議論から意見をまとめていく力、問題を解決していく力を育まなくてはならないのに、日本の学校にそれはありません。私がカロリンスカに勤めていた頃、多くの異なる国からきた医師たちと教育制度について情報交換をしたことがあります。そのときに感じたことは日本の受

親子面談会場。子供と共に各教科担任のブースを回る。

広い運動場の一角で息子と

験で詰め込まれた多くの知識は就職後、多少の役にたっても、多くは無駄に思えたことでした。そしてスウェーデン、ヨーロッパは中高生の頃から自活できる力、自己開発できる力を学び、学んだことが社会に出てからも人生を有意義にすることに直結する実学中心の学生生活をおくっていると感じました。

寄宿高に渡らせて4ヶ月後の2016年10月に初めて親子面談にいきました。とても寂しさを感じていた親の心配をよそに、ほとんど連絡を取りたがらなかった息子でしたが、親子面談では嬉々として会場を連れ周り、各教科の先生を紹介してくれました。先生方からも素晴らしい言葉をいただきました。また、寮の先生からは毎日、規則正しい生活をし、ジムにテニスに、バイオリンに頑張っていることや挨拶が素晴らしいことなどを嬉しそうに教えてくれました。それらの態度はまさに彼がスウェーデンで持っていた態度であり、日本で失ったものでした。あぁ、彼らしく生き生きとやっているのだ、と安堵しました。中休みを過ごす、エジンバラの知人宅に向かう車中でうとうとしかけた時、彼はボソっと「お父さん、いま、僕はとても充実しているよ」とつぶやきました。胸が熱くなりました。

今年度からはシックスフォームに入り、いよいよ大学受験の準備が始まります。だというのに4教科しか選択しなくて良いのです。彼は数学、物理、コンピューターと音楽を選びたいようです。私たち親からすると、音楽、、、、ですか？となるのですが、イギリスの入試では日本のような画一的なセンター試験などなく、選択教科の成績が良いこと、それに加え音楽演奏などの学校行事への参加、社会活動の参加などで生徒を選ぶのだそうです。もはや日本への高校、大学への後戻りはできなくなりました。民主国家の真逆へ突き進むアナクロニズムに退行していく日本、少子高齢化を解決できぬまま縮小していく日本にこだわらずとも、広く飛び回れる翼を持ってくれればそれでいいや、と思います。が、地理も国語も科学も捨てちまって大丈夫か？と日本人な私たちは一抹の不安を拭えないのも確かです。はてさて、どうなりますやら。不安いっぱいですが、彼らしく、彼の本来もった能力を伸ばし、世界でも自立、自活できる逞しい人間に育ってくれることを信じるよりほかありません。

〈鈴木内科医院院長・本協会常任理事〉

スウェーデン便り

一 箭 珠 貴

こんにちは。

今回はスウェーデンが国境封鎖しシリアや中

東からの亡命希望者の無条件受け入れを中止するまでに身近に起こったことを少しお話ししたいと思います。本当の意味で身近に感じたのはちょうど去年の夏あたりだと記憶しています。

大量の難民が中東とくにシリアから押し寄せはじめてからは、彼らの住居が足りない、これが緊急の問題だ、と連日報道されていました。これは当然の結果でもあります。なぜなら、全体として人口が増えているスウェーデンでは新しい住居がほとんど建っていないため、スウェーデン人でさえ住宅不足により売買する住居が高騰し、賃貸もほぼ不可能といった状況が何年も続いているからです。もちろん近年の中東の政治不安定をふまえ、シリアからの移民に無条件に永住権を与えはじめてからは、亡命者受け入れセンターや宿泊施設は以前より満員状態です。

政府や自治体の政治はよく機能しているのでもちろん十分予想できた結果でした。しかし、戦禍の中を逃れてきた、一刻を争う待つことなどできない人たちの迅速な救済、それがこの国の決断でした。

教会を解放し、使用していない学校や刑務所、ありとあらゆる場所を模索しぎりぎりの努力が続きます。移民局が、一般市民に自宅の空き部屋を賃貸する募集を始め、軍用の宿泊テントを設営しそこに冬まで寝泊まりするテント設営も同時に行われました。

そのとき私は、毎日スウェーデン語学校にいっている最中でした。ある日、語学学校の教師が、「夜間、学校全体を難民の宿泊、食事、シャワーに提供したいと思います。難民のみならず、多くのボランティアが出入りします。皆さんの授業に影響は出ませんので安心してください、そしてこの決断に理解をしてくれることを希望します。」

日本人でありこういった問題が他人ごとであった私が、この問題はすぐ身近にあると感じた瞬間でした。

流入する難民数を考えると追いつくはずもありません。しかし、スウェーデンはその後も必死に受け入れ努力を続けます。最終的には移民局のカウンターのわずかなスペースに難民を寝泊まりさせるしか場所がなくなりました。

間もなく、国境封鎖という最終決定がなされました。

今現在、難民にかかる医療費、歯科治療が右肩上がりに増えています、これを他のスウェーデン人たちの税金で補われています。どのように社会に融和させるか、サポートできるか、スウェーデンの本当の奮闘はこれからです。

〈スウェーデン・カロリンスカ大学病院〉

世界カーリングジュニア選手権に参加して

札幌学院大学カーリング部

札幌学院大学カーリング部は、昨年11月に日本ジュニア選手権（青森）で男子が優勝し、1月にスウェーデン（エステルスンド）で開催された世界ジュニアB選手権に日本代表として出場いたしました。大会は、世界23か国の代表が2月の世界ジュニア選手権を目指して出場しました。

私たちチームは、1年生主体のチームで初めての国際大会出場で、出発前から練習もさることながら、出発準備に四苦八苦でした。初めて

のヨーロッパ、しかも北欧に出かけるとなると、気温や天気、服装の準備や食事の心配など不安ありましたが、期待満載で出発しました。

東京を１月１日（元旦）午前０時55分に出発。ドイツ（フランクフルト）を経由しストックホルム、更にエステルスンドへ乗継、到着したのは現地時間で１月１日午後16時15分（日本時間で１月２日午前０時15分）でした。まさに１日がかりの移動となりました。また、ストックホルムでは15時前なのに夕日が、エステルスンドに16時過ぎに着いたらもう夜でした。翌朝起きても、なかなか太陽が昇らず、短い昼間にびっくりでした。

大会は、１月３日からだったので、到着した翌日は、会場を下見にいきました。ホテルで会場への行き方を確認し、路線バスで向かいます。バスの運転手さんに乗り継ぎを片言の英語で再確認しバスターミナルで乗り換えようとしたとき、聞いた方向とは逆に歩きかけた時に親切に呼び戻してもらい、地元の皆さんの優しさに感謝しました。

やはり、何より食事が大事と、日本からレトルト食品など買い込み持参しましたが、ホテルの食事がおいしく、少し持って帰ることになりました。また、レトルトを食べるのに、１台の電子レンジを占拠することになり、迷惑をかけたかもしれません。

チームは善戦するも、予選リーグを３勝４敗で敗退、全体の15位で終了することとなりました。この経験を次のシーズンに生かし、競技に活かしていきたいと思います。多くのご支援、ご声援をいただき、ありがとうございました。

スウェーデンでの子育て体験

岸川淳子

１．はじめに

日本では少子高齢化が問題になってから長い年月が経っていますが少子化から脱却する気配は一向に見えず、効果的な対策が打ち立てられないままいたずらに時間が過ぎているようです。私は幸い２子を授かり日本とスウェーデンで子育てをする機会に恵まれました。結婚、妊娠、出産、子育て、そして異国での体験は、それ以前には想像していなかった変化を私にもたらしました。一個人の体験に過ぎませんが、スウェーデンでの体験が何かのヒントになることを願って感じたことを綴ってみたいと思います。

２．日本での妊娠、出産、育児

私達の世代は、1986年に男女雇用機会均等法が施行された後の世代で、“仕事か結婚か”といった選択から“仕事も結婚も”が手に届く現実になったと言える世代です。私が長女を出産したのは30代半ば近くのことでした。子供を持ってみると、当たり前に５時を過ぎてこなしていた仕事や会議などを、“なぜ無償で当然のように残業時間に設定されているのか”と、と

たんに疑問を感じるようになりました。子供が体調を崩せば“子供が体調を崩すのは避けられないことでどうにもならない。ベビーシッターや親に頼らなければ仕事が出来ないとすると、大半の女性は仕事が出来ず少子化だって当たり前じゃないか”と疑問を感じながらも悶々とするしかありませんでした。30代半ばを過ぎて幸いにも次女を授かり出産後半年ほど過ぎたあとに、子供とともに渡瑞する機会を頂きました。

バスのベビーカースペース

3．ストックホルムに到着して

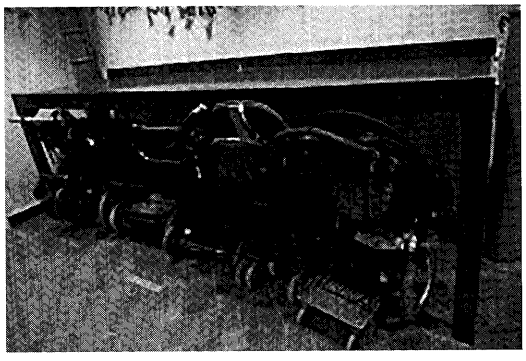
スウェーデンでは自転車用の道路が整備されていて安心して歩道を歩くことができます。数段の階段でも必ず横にベビーカーが通行できるようにスロープや板が渡してありました。冬の雪道は日本のベビーカーでは全く対応できず、まだ歩行出来ない幼児用のもの（日本のA型にあたるもの）はがっちりと大型で重く、車輪が直径20センチはあるのではないか？といった立派なものです。小回りに欠けるのですが多少の段差は乗り越えられるので慣れれば快適です。バスに乗る時には地面から段差があるので押し上げる必要がありますが、周囲の人は必ず手伝ってくださり、また乗り込めばベビーカーが並べられるスペースがあるためそこにそのままベビーカーを並べて置くことが出来ました。その状況にバリアフリーの意味を実感したものです。ベビーカーを押してバスに乗る場合、子供はもちろん親もバスを無料で利用出来たのはありがたいことでした。スウェーデンの人口密度が東京よりも低いから実現出来ることだとは思いますが、“日本ではベビーカーをたたまないと迷惑だと言われることがある。ベビーカーをたたむか、どうするか？といった議論が日本にある”と説明すると驚かれたものです。

4．プレスクール（*Förskola*）での生活

スウェーデンに一年以上滞在する予定であればパーソナルナンバーが取得でき、住民の基本的なサービスが受けられるようになります。スウェーデンは共働きが普通なので１歳から子供をプレスクール（*Förskola*）に入れることが可能です。移民が多いためインターナショナルのプレスクールが多くあり、基本的には希望者は全員公立や私立のプレスクールに入学可能です。金額は親の収入に応じてかわりますがパーソナルナンバーがあれば2017年現在スウェーデンでは、第１子は最高1362Kr（1017年１月現在

スロープ

階段



プレスクールの玄関

1Kr約13.8円）第２子908Kr、第３子454Kr、４子以降無料です。プレスクールは日本で言う幼稚園と保育園を合わせたような所で、無職や学生であっても週30時間まで利用可能、フルタイムであればそれ以上の利用が可能となっていました。教育では、子供にはのびのびと興味のあることをさせることがモットーで勉強に関してはかなりゆったりとした印象です。外歩きは毎日で小遠足のようなものにもかなりの頻度で出掛けて、夏は雨（ストックホルムでは通り雨のようなものが度々ある）に対応したコートを羽織って森に出かけて過ごし、季節にはブルーベリー摘みやキノコ狩りなどを楽しみます。近隣の博物館や美術館、動物園などに定期的に出かけるなど、屋外での学習を大切にしています。校庭や近場で遊ぶ時には集団で同じ一つのことをするのでなく各自がやりたいことを好きなようにしており、ブランコに乗りたい子供がいれば、“後ろの子がいる時は、ちゃんと順番に交代しなさい”といった感覚がなく、その子が飽きるまでブランコを楽しませることには当初驚きました。冬に雪が降っても外遊びを楽しみます。幼児をベビーカーにのせたまま雪の中でも外に出すのには驚きましたが、寒い外気に慣れさせると呼吸器の機能が強くなるという考えがあるようです。毎日スナックタイムがあり公園で果物やサンドイッチを食べるなど、スナックも栄養補給の一環と考えられています。食事はベジタリアンや宗教上の違いは問題なく許容していましたし、昼食はバイキング形式となっており好きなものを好きなだけ取るスタイルで、好き嫌いをせずに出されたものは残さず頂くといった感覚はありませんでした。子供の習い事は自治体がプログラムを組んで格安で提供してくれますが、日本のように就学前から習い事や勉強をはじめることはあまりありません。子供に無理なストレスをかけてはいけない、といった基本的な考えのためです。小学校に入学した後でも週末に宿題が出ることはありません。週末にゆったりと家族で過ごす時間を尊重しているためです。スウェーデンは移民が多く、プレスクールでも小学校でもヨーロッパ人、アメリカ人、アジア人、アフリカ人と多種多様な人種が混じって学習していました。研究者用の寮の近くには、公立の小学校にインターナショナルのコース（英語）が設置されていました。興味深いのは、母国語をしゃべる権利を尊重するといった考え方で、母国語の補習システムが希望者には用意されていました。外国人に対しての差別対策や、多様性を受け入れるための教育がなされていましたが、現実には理想通りにいかず移民が増えて共存が難しい面があるようです。人権に関わる問題に対しては、学校側は非常に真剣に対応していました。

５．スウェーデン社会に触れて

せっかくの機会なので私も何か仕事をしてスウェーデン社会を体験してみたいと考え保育園のようなシステムの利用を考えましたが、すぐに無理だとわかりました。育休制度がしっかりと確立されているために１歳未満の子供を預ける制度がなかったのです。まずは１歳までは子供とすごすことにしました。日中次女を連れて買い物や散歩に出かけ周囲を見回してみると一人でベビーカーを押す男性とすれ違うことが日常で、平日にも公園にパパ友らしき集団がいることに気が付きました。子供を遊ばせている父親が何人か集まって父親同士で会話している姿は非常に新鮮でした。色々聞いてみると、“子供とこうやって遊んでいるのは楽しいよ”といった話で、卑屈な印象はなくごく自然に子供と遊んでいる様子でした。平日の昼間に父親が子供を抱っこ帯に入れてあやしながら、別の子供を砂場で遊ばせている姿は日本では想像できなかった光景でした。

スウェーデンの産休育休は現在子供が12歳になるまでに男女合わせて480日あり、その内の３か月は父親、母親それぞれ固有の休みで相手に譲ることが出来ません。父親が自分で消化しないとそのまま消滅してしまうため、父親も最

低３か月育児休暇を取らないと損をしてしまう仕組みです。以前はパートナーに譲ることが可能で妻に譲る父親がほとんどであったため、1995年には父親しか使えない育休として30日、後に60日となり2015年から90日に増やされました。その間の給料は収入に応じて両親保険によって支払われ学生や無職であっても生活の心配がなく、給料の10％上乗せしてくれる企業もあります。さらにパートナーには平日10日間、育休の他に出産前後休みがあります。授乳の関係でまず一年は女性が休み、そのあとは男性が休む、以後二人で分け合うスタイルが多いようです。公務員の友人の話では男女とも100％育休を取り、復帰しているとのことでした。現場の医師達も当然の権利として男性も女性も育休を取得します。研究所で働く日本人女性に“ここは子育てに関しては天国みたいなところよ。あなたも働いてみた方が絶対いいわよ！”と背中を押され、幸いにも次女が１歳になった時に研究に従事する機会を頂きました。無給ですが制度上は常勤の職員とみなされ長女、次女のプレスクールを無料で夕方５時までお願いすることが出来ました。スウェーデンでは原則大学まで公立の学校は無料で進学出来、塾も無いため教育にはお金がかかりません。税金が高いものの、しっかりと還元されているのです。

仕事を開始してみると、スウェーデンでは労働者の権利が非常に大切にされる社会であることを実感しました。男女同権は当たり前で男性が家事を請け負うことは当然といった雰囲気があり、実際私の男性上司は自らの手料理でもてなしてくださいました。労働者は週に40時間以上仕事してはいけない決まりで医師でも同様です。男性医師も“子供を迎えに行かなきゃ”と定時に帰宅し、手術後の患者さんの具合が悪くなっても現場に戻ることはありません。自分の体調が悪い時には仕事場に連絡を入れて休みを取ればそれで問題はありません。多くの日本人の感覚であれば“休みの間迷惑をかけてしまって申し訳ありません”と業務を請け負ってくれた人に頭を下げますが、スウェーデンではその感覚はありません。仕事の割り振りは管理者の当然の責任であって労働者同士の問題ではないからです。実際私も子供の熱が出た時にやりくりをして仕事場に行きましたが、“えっ、子供が調子悪いの？それじゃあ、なぜ君はここにいるのだね？早く帰りなさい”と言われ、噂は本当だった⁉と拍子抜けし、以後あっさりと休みをとることにしました。病児看護の休暇をとる場合にも給料は保障されており、男性も女性と同程度に休んでいる印象でした。医師で外来や検査の予定があっても休むのが当然で、職場に迷惑をかける感覚はない様子です。さらに一般的には夏季休暇は５週間あり、その間お金が必要だからと、特別手当を支給する制度もあるようで至れり尽くせりと感じました。産休に関しても医師も育休の権利を行使するのが普通で、その間の心配をする必要はないそうです。職場に迷惑をかけるといった意識を持つ必要がなく、給料が支給され、男性も女性も子育てに参加出来るとは、日本人にとっては現実感が持てません。スウェーデンでも制度が出来た当初は同様に男性が育児休暇を取得する割合は低かったのですが、制度の工夫により現在は育休を取得することが普通となり、教育熱心な家庭ほど育休の取得率が高くなっています。“マタニティハラスメント”“パタニティハラスメント”は誰に確認しても聞いたことが無く、万一マタニティイハラスメントなどあろうものなら、セクシャルハラスメント同様に大変な事態になりそうです。スウェーデンでは労働者の権利が重要視されている分、サービスを受ける側にとっては不便であり、行き届いていないと感じる部分が日本人の感覚では多々あります。医療は無料ですが気軽に医者に受診できるシステムではなく、まず地域センターに電話をして症状を説明して指示を仰ぎます。子供の発熱程度では、“様子を見てください”と言われ受診は出来ないことが周囲では多かったです。次女が体調を崩し、数日発熱が続き心配になって相談をした時には

“あなたは医師に会いたいですか？”と聞かれ、“勿論です”と返答して無事に受診が出来ました。完全に予約制で医師の診察は30分程度で患者１人とゆったりした印象でした。しかし検査は本当に必要最小限のことのみで、“３日後にこちらから電話で経過を聞きます”と言われ、実際に電話がかかってきて軽い確認の後に終了となりました。妊娠出産に関しては定期的な助産師のチェックを受けるのみで、正常分娩であれば医師に一度も会うことなく出産の翌日には退院となって終了します。当直や休日の体制は日本からすると手薄な印象ではありますが、そういうものと国民は思っている様子です。

６．終わりに

スウェーデンでは日本のような細かなサービスや、お客様主体の行き届いたサービスは期待出来ません。しかしながら労働者の権利や福祉が重視されており、少なくとも“妊娠すると職場に迷惑をかける”“仕事上不利益をこうむる”“子供の具合が悪くても親が休めない”といった心配がない社会と感じました。実際に低下傾向であったスウェーデンの出生率は1995年から回復傾向に転じています。男性にも育児の機会があることで家族への理解が深まるだけでなく、育児を主体的に楽しむことが出来ます。私自身、想像力に乏しく子育てをするまで気付かなかったことが多くありました。スウェーデンでの生活で価値観の違う社会、文化に触れたことは自らの固定観念に気が付き、いかに“世間の常識”とされることに思考が縛られやすいのか実感する機会となりました。残業が常態化し、派遣の増加等労働環境が悪化している日本の社会で子育ての環境を変えていくのは容易でありませんが、日本の常識では頭から無理と思われがちなことが、違う価値観に基づいて実現している社会が実際にあることに勇気付けられます。

謝辞：この原稿の作成にあたっては多くの方々にご協力を頂きました。カロリンスカ大学病院内科：一箭珠貴先生、ウプサラ大学病院外科：山本慎治先生、中村香奈子さん、高井淑子さん、鈴木内科医院：鈴木岳・晃子先生に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

〈大谷地病院〉

「初出『こころの健康シリーズⅦ－No.4』2017.3　日本精神衛生会」

北海道スウェーデン協会
平成28年度の主要行事

■5月21日土曜日

第1回常任理事会　会場：北海道大学中央キャンパス総合研究棟2号館

■6月8日水曜日

平成28年度理事会、総会及び懇親会（北海道大学ファカルティハウスエンレイソウ）

〈総会出席者12名・懇親会出席者13名〉

■6月11日水曜日

協会誌「白夜」37号発行

■10月30日日曜日

北海道大学サステナビリティ・ウィーク2016行事

「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育のあり方」

講　師：Mats Engstrom（駐日スウェーデン大使館）

参加者：100名

主　催：北海道大学

後　援：北海道スウェーデン協会

会　場：北海道大学学術交流会館

■12月11日日曜日

第23回スウェーデンルシアを迎える会に協賛

参加者：800名

主　催：2016スウェーデンルシアを迎える会

後　援：北海道スウェーデン協会

会　場：恵庭市民会館大ホール

■1月3日日曜日

世界ジュニアカーリング選手権（スウェーデン・エステルスンドにて開催）に日本代表として参加する札幌学院大学カーリング部に協賛

■1月27日金曜日

新春講演会　講師：目黒　聖直氏　北海道開発局入札契約監察官（もと駐スウェーデン日本大使館一等書記官）

「北海道の小規模市町村市街地の再生～スウェーデンにもヒントを求めながら～」

ミニコンサート　デュオ　Spruket Krus　野間美紀、野間友喜　ご夫妻

「スウェーデンの伝承歌」

参加者：70名

新年交礼会

参加者：34名

共　催：（公社）北海道国際交流・協力総合センター

会　場：ホテルモントレーエーデルホフ札幌

■2月13日月曜日

山崎　純　駐スウェーデン日本大使歓迎レセプション

参加者：20名

会　場：ホテルモントレーエーデルホフ札幌

〈事務局長〉

事務局だより

事務局長５年目になりました横山隆です。平成28年度も（公社）北海道国際交流・協力総合センター（ハイエック）、（一財）スウェーデン交流センターおよびホイスコーレ札幌の皆さんと手を携えて活動させていて頂きました。厚く感謝申し上げます。ただひとつ残念なことは、在札幌スウェーデン名誉領事館が閉鎖になったことです。駐日スウェーデン大使館は名誉領事館の再編を以前より行っており、平成26年４月には在北九州名誉領事館（北九州市）を閉鎖し、以後、札幌と神戸の名誉領事館２館体制にしていました。平成28年度に入り、在札幌名誉領事館を閉鎖し１館体制にしましたが、12月に在福岡名誉領事館（古賀市）を開館させ、在神戸名誉領事館との２館体制を復活しています。神戸、福岡とも産業機械メーカーが名誉領事館を引き受けており、民間友好交流よりも、経済交流や実際の領事事務の必要度を重視したものと考えられます。名誉領事館業務を引き受けられていた北海道郵便逓送株式会社社長加藤欣也名誉領事のこれまでのご努力に感謝いたすとともに、今後とも日瑞友好交流にご支援いただけるものとご期待申し上げております。

さて、平成28年度の活動を振り返り、ハイライトでお伝えしておかなければならない事項を三つ挙げてみたいと思います。

一番目は、６月８日の平成28年度理事会・総会です。杉本会長が欠席となったため、加藤理事長のご挨拶ののち、加藤理事長が議長を務め、議事を進行しました。

第１号議案「平成27年度事業報告並びに収支決算報告並びに監査報告」、第２号議案「平成28年度事業計画（案）並びに収支予算（案）」では、事務局から議案書と監査報告書の説明があり了承されました。

第３号議案「平成27年度奨励基金袖手決算報告並びに監査報告」、第４号議案「平成28年度奨励基金予算（案）」では、事務局から議案書と監査報告書の説明があり了承されました。

第５号議案「理事選任並びに今後の会の運営について」では、事務局からお示しした（公社）北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）副会長・専務理事越前雅裕氏の理事就任が了承されました。また、平成28年度の活動では、平成30年（2018年）に北海道スウェーデン協会創立40年を迎えると同時に、日本とスウェーデンが国交関係を結んで150年目という節目の年となるため、記念行事の企画を進めるという方針が示されました。日瑞両大使館を中心として国交樹立150周年記念行事が検討され始めており、本協会としても、在北海道スウェーデン関係諸団体と協力して、記念行事の企画を進めます。また、この活動を通し、若い会員の増強を図りたいと考えております。

二番目は、１月27日に行われた新春講演会およびミニコンサートと新年交礼会。講演会の講師は北海道開発局入札契約監察官目黒聖直氏（もと駐スウェーデン日本大使館一等書記官）。講演は「北海道の小規模市町村市街地の再生～スウェーデンにもヒントを求めながら～」と題し、急激な人口減少により疲弊する小規模市町村をどう元気づけるか、スウェーデンの地方小都市の実例を参考に

ソレンチューナ・セントラム（スウェーデンの中小都市の中心市街複合施設）

ご自身で描かれた地域再創生の処方箋を示していただきました。

ミニコンサートは「スウェーデンの音楽事情とミニコンサート」と題し、スウェーデンに音楽留学されているご夫婦が一時帰国された機会を捉えたタイミングの良い企画となりました。招聘にご努力された本会坂本常任理事のご努力に感謝いたします。

ユニット名はSprucket Krus（スプルケット　クルース）。奥様の野間美紀さんを中心とした、日本人による、スウェーデン伝承歌をスウェーデン語で歌うプロジェクトです。スウェーデンの言葉や、日々の生活から生まれる歌の美しさを伝える活動を目指しています。スプルケット　クルース（欠けた器）とはスウェーデンの古い詩の一節で「美しいものは器に関わらず美しい」という意味が込められているそうです。

野間美紀さん／歌、フルート

スウェーデンの民間伝承歌や伝統音楽を歌う音楽家、フルート奏者。アイルランド音楽の演奏から活動を始め、スウェーデン・ダーラナ地方へ音楽留学を経て、現在はスウェーデン語の歌の魅力を伝えるべく活動しています。

野間友貴さん／ハンゲンダル・ダモーレ、マンドーラ

スウェーデン伝統音楽に精通するフィドル奏者／作編曲家。現地留学を通し、各地の名手からフィドルの奏法と曲を学び、日本全国および北欧各国で演奏活動を行っています。日本へ北欧のフィドル文化の醍醐味を伝える一方、北欧へは伝統音楽の可能性を提示し続けています。

三番目は２月13日の山崎純駐スウェーデン日本大使の來道。海外駐在の大使が一時帰国して一同に会し、政府からの方針伝達やそれぞれの任地の状況報告などを行う会議後、日瑞の自治体・民間交流の実態を日本側から見て見たいとのことで來道されました。スウェーデン赴任後、当別町との交流を続けるダーラナ地方レクサンド市を訪問し、一時帰国前には枝幸町と交流を続けるソレフティオ市やウメオ市等も訪問されています。

到着後、ウメオ大学で研究された経験をお持ちの北海道大学経済学研究院町野研究院長や、北海道辻副知事を訪問し、北海道大学の鈴木彰ノーベル賞受賞記念ホールも見学されました。夜の歓迎レセプションにはスウェーデン関係諸団体の主要メンバーや、遠路はるばる枝幸町から村上町長にもお越

しいただき、スウェーデン調査を控えた宮城県議会遊佐議員、北海道総合政策部三本国際局長なども参加され、山崎大使に、政権交代後のスウェーデンの様子や、英国のEU離脱の国民投票結果や政治状況について、最新の情報を伺う事が出来ました。また、落ち着いた雰囲気の中で交流も深められました。

翌２月14日は、札幌市秋元市長を表敬訪問した後、当別町へ向かわれ、宮司町長を表敬訪問されました。また、スウェーデン交流センターも見学され、実りの多い２日間の日程を終えられました。

〈事務局長　横山　隆〉

スピーチする山崎大使

記念品として贈呈したアイヌ文様のはっぴを着た山崎大使と杉本会長

皆さんと記念写真に納まる

発 行 人
北海道スウェーデン協会
会長　杉　本　　拓

〒062-0911
札幌市豊平区旭町３丁目1-7　北海道東リビル３階
㈱アラゼン内
TEL(011)837-8411

印刷／㈱アイワード
札幌市中央区北３条東５丁目
TEL.241-9341 FAX.207-6178